

(様式 13 号)
(博士後期課程)

平成 27 年 3 月 4 日

博士論文審査報告書

デザイン研究科長 様

審査員主査 中原 宏

審査員副査 矢部 和夫

審査員副査 柿山 浩一郎

審査員副査 羽深 久夫



学位申請者氏名	佐久間 学	学籍番号	1 2 6 5 0 0 3
申請学位 (専攻分野)	博士 (デザイン学)	専門分野	<input checked="" type="checkbox"/> 人間空間デザイン分野 <input type="checkbox"/> 人間情報デザイン分野
タイトル (サブタイトル)	1860年代から1950年代の写真資料による建築類型を基にしたアイヌ民族における集落の実態と建築物の歴史的変遷過程		
審査日程	最終試験： 平成27年1月7日 公開発表会： 平成27年1月23日		
審査結果	<input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格		

※ 様式第6号「博士論文内容の要旨」を添付すること。

審査結果の要旨

本論文は「1860 年代から 1950 年代の写真資料による建築類型を基にしたアイヌ民族における集落の実態と建築物の歴史的変遷過程」という研究題目で、アイヌ民族の建築について、「1860 年代～1950 年代」を対象として写真資料による類型化を行うとともに、この類型を基に集落の実態と建築物の歴史的変遷課程を明らかにしたものである。

アイヌ民族の建築に関する既往研究の主要なものは、1930 年代後半から 1940 年代前半を対象にしたものであり、また、既往研究の成果を研究対象年代別に見ていくと「1860 年代～1950 年代」については、これまで研究が十分に行われていなかった。この期間のアイヌ民族の建築史を補うことが本研究の背景にある。

本研究の主な成果は以下のとおりである。

- 1) 既往研究が明らかにしたアイヌ民族の建築物の特徴を研究対象年代別にまとめ、既往研究の成果と研究課題の所在を明確にするとともに、本研究の役割と学術的意義を明確にした。
- 2) 古地図や空中写真等を基に、集落内の建築配置がわかる位置図や土地区画図を作製したことにより、本研究で用いた写真資料の信頼性をさらに向上させた。
- 3) 研究対象年代の建築物の特徴や変遷を考察するために、全ての年代に対応できるアイヌ民族の建築物の類型化を行った。
- 4) 1940 年の二風谷村と白老村の、アイヌ集落内におけるアイヌ民族の建築物の写真と平面図を記録した資料を用いて、伝統的なアイヌ民族の建築のみならず、これまで研究対象とされていなかった改良型のアイヌ民族の建築も研究対象とし、集落内の各建築物の特徴をまとめるとともに、各集落に見られた建築物の実態を明らかにした。
- 5) 上記 2 集落の比較分析を通して、1860 年代から 1950 年代のアイヌ民族の建築物の実態および建築物の変遷について明らかにした。

以上のように、本研究はこれまで研究が十分されていなかった「1860 年代～1950 年代」のアイヌ民族の建築の実態を明らかにしたものである。とりわけ、既往研究では写真を研究資料としたアイヌ民族の建築に関する研究がない点に本研究の新規性がある。加えて、研究対象年代に対応した建築物の類型化を行うことで、アイヌ民族の建築の変遷を明らかにするとともに、改良型のアイヌ民族の建築物も対象とすることで、通史としてのアイヌ民族の建築史を見る必要性を提示したことが意義深い。

審査結果の要旨

本論文については、平成 27 年 1 月 7 日 (水)、本学芸術の森キャンパス「大学院棟レクチャールーム」において審査員 4 名による「本審査会 (最終試験)」を開催し、本審査会実施要領に基づき、本論文についての発表と口頭試問を行った。

多くの質疑に的確に回答できたことに加え、論文も予備審査での指摘事項を充分ふまえた適正な修正が行われていると判断した。なかでも、論文題目を修正したことにとともに、論文題目が研究目的や成果と合致し、極めて具体的で明確な内容を表出するものとなった。併せて、論文の構成も修正したことにより、研究の意義、成果、方法論等の新規性が鮮明になった。さらにデザイン学の視点を明瞭にしたことにより、デザイン研究科の博士論文としても大変意義深いものであると判断した。

以上のことから、最終試験は「合格」と判定した。なお、軽微な指摘事項 (字句の修正) が求められた。

また、平成 27 年 1 月 23 日 (金)、本学芸術の森キャンパス「階段教室」において「公开发表会」を行った。多くの質疑に的確に回答できたと判断する。

平成 27 年 2 月 10 日 (火) に提出された最終論文は、公开发表会での質疑や助言を充分にふまえるとともに、最終試験後の指摘事項については、すべてにわたり適正な修正が行われていると判断する。

以上のことから、博士論文審査は「合格」と判定する。

(以上)